

# 特集 歴史社会学

## 序 文

佐藤 香

歴史社会学とは何か。歴史社会学の外側からみても、内側にいると思われている研究者からみても、その実像は明らかではない。「歴史社会学」がカバーする領域についても、理論や方法についても、ほとんど合意のないままに数多くの研究が量産されている現状を、どのように捉えるべきなのだろうか。

一般に、歴史社会学は家族社会学・産業社会学・都市社会学などと同じように、社会学の下位領域の一つと考えられているが、実際には、これらの連字符社会学の、さらに下位領域にあると考えたほうが妥当であるのかもしれない。家族社会学のなかでの歴史研究、産業社会学のなかでの歴史研究といったように、特定のテーマを扱う研究のなかで歴史的関心にもとづく研究の総称が現在の歴史社会学なのではないだろうか。そのため、歴史社会学の研究者であっても、テーマが異なれば、直接的な出会いの機会はほとんどない。こうした研究状況のもとで「合意なき量産」といわれる事態が生じているとみることができる。

歴史社会学が独自の研究分野になるべきか、あるいは、なりうるかについても、見解はさまざまである。けれども、見解の如何にかかわらず、歴史社会学がこれまで蓄積してきたものの全体的な像を共有し、その方法を再検討することは重要なのではないかと思う。本特集の執筆者の一人である広田照幸氏は、かつて、歴史社会学について次のように述べた。「社会学と歴史学という二つのディシプリンを無視することも可能ではある。……それらに依拠しない〈知〉は生産しうるし、むしろ重要な〈知〉の革新のためにはそこから逸脱することが必要な場合もあるだろう」（広田1995、佐藤香論文参照）。歴史社会学が、どのような方法で、どのような〈知〉を生産してきたのか、社会学と歴史学のディシプリンを、どのように「脱構築」してきたのか、あるいは、してこなかったのかを省みることがなければ、「合意なき量産」が続くことになるだろう。本特集は、こうした関心から企画・編集された。

さいわい、本特集では多くの執筆者の協力を得ることができ、9本の論文を収録させていただくことができた。いくつかの重要なテーマについては、残念ながら、扱うことができなかったが、本特集から歴史社会学の営みの多様さはもちろんのこと、その豊かさを見

ていただくことができると思う。

第一の論文、佐藤香「方法としての計量歴史社会学」は、戦後日本における初期の歴史社会学的研究および計量社会学の展開と結びついてきた階層・移動研究に焦点をあてて、歴史的研究における計量的な方法の可能性と課題についての限定的な議論をおこなっている。

第二の論文、太田有子氏「比較分析の方法と課題」は、海外の研究動向を中心として、より広い視野から歴史社会学の方法としての比較分析について、方法論と事例の検討をふまえて議論をおこない、今後の課題にも言及している。

第三の論文、大賀哲氏「国際関係論と歴史社会学」では、国際関係論と歴史社会学の関係および国際関係論における歴史社会学のもつ可能性を検討している。ここでは、ウェーバー型とフーコー型という歴史社会学の二つのタイプを設定したうえで、ポスト国際関係論の再構成が試みられている。

第四の論文、落合恵美子氏「ユーラシアプロジェクトの達成」は、歴史人口学の領域で実施されたユーラシアプロジェクトを取り上げて、プロジェクトにおける歴史人口学の方法の展開と、それによってどのような新たな知見がもたらされたかについて論じている。

第五の論文、赤川学氏「日本の身下相談・序説」は、身上相談という「資料」をもちいて、方法論に関する検討もおこないつつ、日本社会において「性」がどのように変容してきたのか、また隠蔽されてきたのかを明らかにする試みである。

第六の論文、牟田和恵氏「家族の近現代」は、家族の歴史社会学研究の蓄積および、これらの研究と現代社会との関連を論じたものである。とくに80年代以降の「近代家族」論の展開については広汎なサーベイがなされており、そのうえで提起された「ジェンダー家族」という概念にもとづいて、天皇制と家族に関する分析にも言及している。

第七の論文、藤田弘夫氏「都市の歴史社会学と都市社会学の学問構造」は、都市自体が多義的であるために都市を対象とした研究も多義的にならざるをえないこと、歴史的な研究も、その多義性のなかに含まれてきたという研究史をふまえ、都市の歴史社会学的研究はようやく端緒についた段階であること、今後、どのような展開可能性が存在すると考えられるかを議論している。

第八の論文、広田照幸氏「教育の歴史社会学」は、サーベイを中心として、教育社会学の領域における歴史的研究の展開と、現在の状況について議論をおこなったものである。歴史研究においては、同時代的な意味をもつ鋭い「問い」を立てることが重要であるが、現状では「問いの空洞化」が進んでいるという厳しい指摘がなされている。

第九の論文、佐藤俊樹氏「社の庭」は、他の論文からみると、やや異色といえるだろう。広田氏のいう鋭い「問い」（必ずしも明示的なものに限る必要はないが）にもとづき、さらに

各方法の限界に意識的な歴史社会学が、どのような〈知〉を生産することができるのか、その可能性を示す一つの事例である。

各論文の紹介は、ごく簡単なものとさせていただいた。これまで歴史社会学が蓄積してきたものの豊かさを知るためには、それぞれの論文を読んでいただき、参考文献リストを参照していただくことが、何よりであると思う。寄稿いただいた執筆者の方々には、この場を借りて改めて御礼を申しあげたい。それとともに、本特集が、専門領域を異にする研究者たちの共通理解を深め、対話の場を築いていくための一助となれば、望外の幸いである。